化学工業日報

2004年（平成16年）4月14日（水曜日）

ペール缶メーカー

採算是正へ価格修正に本腰

原料ＴＦＳが２次値上げ

潤滑油や洗剤など化学品の容器として使われるペール缶が、主原材料のティンフリースチール（TFS）価格の上昇で価格修正が本格化している。TFS価格は昨年夏に一トン当たり五千円上昇し、今春には同九千円の二次修正が行われた。ペール缶メーカーはTFS価格の二次値上げ分による価格修正を昨年末から行ってきたが、浸透する前にTFSの二次値上げが実施されたことで、採算はさらに悪化の方向にある。そのためペール缶メーカーは本腰を入れた価格修正に乗り出している。

ペール缶は九十年前にドラム缶の小型化用途から米ベネットインダストリーによって五ガロン（十八リットル）のペール缶が製品化されたのが始まり。一方、日本では朝鮮戦争で駐留軍の補給物資の輸送、貯蔵用の容器としてJANP缶として製造され、現在、二千三百万缶近くのペール缶が生産されている。しかし、一九九〇年の二千七百万缶をピークに生産量は縮小傾向にある。

それはドラム缶などの大型容器への使用変更や、バックインボックスなど他容器との競合によるもの。さらにユーザーからの価格協力要請により販売単価の下落も続いている。その結果、採算悪化から脱却を図るため今年一月には資本系列を乗り越えたジャパンペールの統合・発足もあった。

TFS価格は昨年夏、一トン当たり五千円上げが実施された。これはペール缶一缶に換算すると十五円ほどになる。また今春の同九千円上げを合わせると業界全体（メーカー四社）では五億円強のコストアップとなり、そのほかイヤー、ツル、バンドなどの部材の値上げを含めると、六億円近くのコスト増といわれている。

ペール缶の国内メーカーはジャパンペールの統合があったことで四社となっているが、業界からは「前回、今回と続いた鋼材値上げは自助努力で吸収できる範囲を超えている」（寺中捷郎ジャパンペール社長）。また「安定供給のためにもペール缶の価格修正にご理解をいただきたい」（関根利三郎新邦工業社長）など、TFS価格の上昇は各社とも大きな負担となっているようだ。